

海外5都市が 練馬に集結！



ソウル – 市民とともに日常生活に都市農業空間を広げる –



ソウルの都市農業は屋上・裏庭などを活用した園芸活動や、郊外の市民農園での活動が中心で、レジャーや教育が主な目的となっています。2011年から進めてきた振興施策によって、市内の都市農業空間は約7倍に拡大しています。毎年、都市農業EXPOを開催するなど、市民が都市農業に参加するきっかけを生みだしています。



都市農業EXPO会場

江東区(カンドンク)市民農園



トロント – 都市農業を通じて移民の社会的包摂を推進 –



市民の約半数が、海外からの移民というトロント。移民たちを地域と繋ぐ役割を担っているのがコミュニティ農園です。「ブラッククリーク・コミュニティファーム」では利用者の祖国の農産物も栽培され、野菜は地域住民に供給されています。その他、ハリケーンで荒れた流域部に畑をつくる施策や、条例による屋上農園の開設など、環境保全を目的とした官民連携の活動が盛んなこともトロントの特徴です。



移民の社会的包摂を目的とした公共施設の屋上農園

ブラッククリーク・コミュニティファームの直売所



ロンドン – オリンピックを機に 2012 か所の農園を開設 –



ロンドンの都市農業には大きく分けて、地域活動によるコミュニティ農園と区画貸しの市民農園の2タイプがあります。このうちコミュニティ農園については、2012年オリンピック開催の際「2,012ヶ所の農園を開設する」という目標を掲げ、現在3,000を超える数まで増えています(キャピタル・グロウス事業)。3分の1は学校内にあり、子ども達が参加しています。



リージェンツ・パーク内の市民農園



キャピタル・グロウス事業



ニューヨーク – 社会の課題を 都市農業で解決 –



ニューヨークでは「グリーンサム」という事業により、現在600ヶ所の農園が運営されています。この活動は1970年代、市の財政危機の際に荒れ果ててしまった空き地を憩いの空間として再生させようと、市民たちが植物を植え始めたのがきっかけです。公営住宅の敷地内にある農園では、若者の就労支援や市民への新鮮な野菜の供給にも取り組んでいます。



就労支援を目的とした農園(NYCHA農園)



グリーンサム農園



ジャカルタ – 急激な都市化に対抗し環境改善に取り組む –



ジャカルタでは、急速な都市化による発展の一方で、自然破壊が進行し、気候変動や洪水の多発など、深刻な問題を抱えています。そういった環境問題を解決するべく、行政と市民の連携が進められているのが「ガンヒジョウ(緑の路地)」と名付けられた緑化活動です。運営の中心は、地域住民が担っています。州政府は専門的なコンサルティングや、種・栽培用ポット等の提供といった役割を担っています。



ガンヒジョウ(路地でのポット栽培)



水耕栽培を行うバライ都市農園



練馬 – 市民生活と融合した生きた農業が営まれるまち –



練馬区では、大都市東京の都心近くに立地しながら、市民生活と融合した生きた農業が営まれています。東京23区の農地の4割が練馬区にあります。区内約270ヶ所ある「自宅前直売所」や「ねりマルシェ」では新鮮な農産物を購入でき、「区民農園」や「農業体験農園」では自ら農業を行うことができます。また、年間を通して果物の摘み取りができる観光農園(果樹あるファーム)も多くあります。



農地面積23区ナンバーワン



練馬果樹あるファーム

開催の趣旨

練馬区は、大都市東京の都心近くに立地しながら、市民生活と融合した生きた農業が営まれています。都市農業は、都市生活に新たな豊かさをもたらすものであり、練馬区の誇りです。この農業と農地を守り、次世代に引き継ぐことが区としての重要な責務です。

世界都市農業サミットは、練馬の都市農業の魅力と可能性を世界に発信し、参加都市が相互に学び、更に都市農業を発展させていくために開催したものです。

来場者数

日 程	事業名	来場者数
11月29日	世界都市農業サミット記念コンサート World JAZZ	1,402名
11月30日	世界都市農業サミット記念 練馬大根引っこ抜き競技大会	481名
	国際会議・分科会(定員360名)	延べ 650名
12月1日	国際会議・シンポジウム(定員592名)	延べ 900名
	ねりマルシェ	延べ 13,500名
	ねりまワールドフェスティバル	延べ 10,000名
		延べ 26,933名



海外参加者

ニューヨーク



ビル・ロサッソ氏
ニューヨーク市 公園局グリーンサム部長



ネヴィン・コーエン氏
ニューヨーク市立大学大学院
公衆衛生学専攻 准教授



リズ・ヌーマーク氏
グレート・パフォーマンス CEO 兼
カチー・ファームおよびシルビア・センター創設者

ロンドン



マーク・アインズバリー氏
大ロンドン庁 再生経済部門 食料政策係長



アンドレ・フルヨン氏
ブライトン大学 建築学専攻 教授



サラ・ウィリアムズ氏
NPO サステイン プログラムディレクター

ジャカルタ



タウフィック・ユリアント氏
ジャカルタ首都特別州 水産農業食料安全保障局
農業部 都市農業課長



ディア・メイディアンティ氏
チトラ・ナガ・チュムラン社
植物防疫研究所長



ラティファ・アブドゥル・ソマド氏
南ジャカルタ市 都市農業者団体 代表

ソウル



ソン・インボン氏
ソウル特別市 経済政策室 都市農業課長



イ・チャンウ氏
韓国都市農業研究所長



カン・ハンソン氏
江西農業協同組合 農業指導者ソウル特別市連合会
西部地区会長

トロント



ソニア・ディール氏
トロントおよび地域保全局 (TRCA)
ハンバー川・都市農業プログラム 事業担当課長



ロンダ・ティテル=ペーン氏
NPO トロント・アーバングロワーズ
コーディネーター



ジェームズ・クーンズ氏
NPO トロント・アーバングロワーズ
コーディネーター

分科会①

テーマ

都市における農産物生産と販売について考える

分科会①では、世界5都市から招いた農業者、実業家および専門家とともに、都市における農産物の生産と販売の可能性について議論します。

- 世界の都市では、誰がどのように農産物を生産し、どのように消費者まで届けられるのか？
- これからの都市における農業ビジネスの発展性は？
- 農業ビジネスを通じた社会や環境への貢献とは？

練馬で活躍する農と食のプロフェッショナルがナビゲーターとなって、練馬と世界の経験を通じて、会場の皆様と一緒に考えていきます。

会場の様子



渡戸秀行氏
ビジネスの観点から見た都市農業について



マーク・アインズバリー氏
ロンドンにおける食料システムや先進的な取組を行う農園について



ロンダ・ティテル＝ペーン氏
トロント・アーバングロワーズの取組について



パネルディスカッション



カン・ハンソン氏



ラティファ・アブドゥル・サマド氏

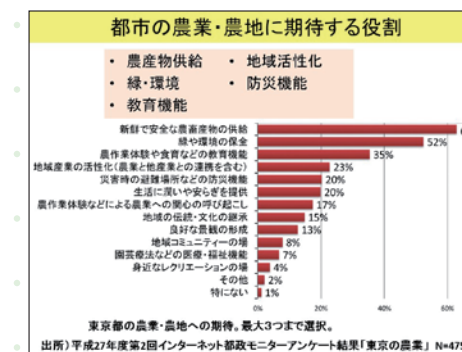


加藤博久氏／岩澤正和氏



リズ・ヌーマーク氏

八木洋憲座長 分科会①の趣旨説明



分科会冒頭の座長による趣旨説明のなかで、都市農業・農地に期待する役割について、都政モニターアンケートを引用したデータを基に説明しました。主に、新鮮な農産物の供給、みどりや環境保全、食育などの役割を期待されています。

座長による総括



八木 洋憲

東京大学大学院 農学生命科学研究科 准教授

都市農業の定義は都市により異なり、特に日本の都市農業は独特であると捉えられてきましたが、より広く捉えることで類似点が多いということが明らかになり、総括として3点にまとめました。

1 点目は、全ての都市において消費者への意識が強いという点です。消費者への直接販売が最も重要な販路でありつつ、飲食店への出荷や加工といった形で新鮮な農産物をいかに提供するか強く意識されていました。また、各都市でも飲食店で地元産食材を使用することは高く評価されていました。

2 点目は、都市農業を活用した教育の推進です。学校との連携や地域活動による子どもへの教育・食育だけではなく、大人や新規就農者に対する教育の場の提供も重要視され、どの都市においても実施されていることが分かりました。

3 点目に、最も重要なこととして、農業や食というものが人と人を結び付ける共通項として機能している点です。

また、都市農業における課題についても共有することができました。世界レベルでの気候変動を含めた環境問題への対策、農地の保全政策、農産物の価値が正当に評価されていない点ならびに、フードジャスティス（食の公正）などが挙げられました。これらの課題解決に向けて都市農業を活用した取組を今後も推進していくことが重要であることを各都市で共有することができました。

リズ・ヌーマーク氏 NPO「シルビア・センター」の紹介



健康食を楽しみ、料理し、提唱すること

シルビア・センターの使命とは、若い人たちがその家族が、それぞれ、健康的な食習慣を身に付けられるようにすることです。そうすることで、健康で生産的な生活を送ることができるようになります。

シルビア・センターとは、次世代が健康的な食事を摂り、料理し、提唱していけるようにするための社会運動の一端であり、これにより、食の未来が根本的に変わる可能性があるのです。私たちの取組は単独では出来ませんので、他と連携して取り組んでいます。課題は大きく、難けの部分もありますが、若い人たちが食卓で現場を見つけていくことができます。

シルビア・センターは、若い人々と共に作業して、健康な人生を送るための基盤を固めるために、2007年に設立されました。これにより若い人たちが健康食を楽しみ、料理し、提唱していくことができます。

リズ・ヌーマーク氏が設立したNPO「シルビア・センター」は、『全てが台所からスタートする』を信条に、子どもたちへの食育を行っている団体です。農業や食を通じた子どもへの教育はどの都市においても重要な取組として実施されています。

分科会① 事例発表概要



渡戸 秀行 / 練馬

区内農業者・江戸東京野菜生産者

私は、平和台で江戸東京野菜を含む約 30 種類の作物を栽培しており、主に庭先の直売所で販売しています。練馬における農産物の主な販路は、卸売市場や庭先販売型直売所、JA 東京あおばの直売所が挙げられます。庭先直売は輸送コストが掛からないメリットがありますが、消費者である住民のニーズに応えるため、多品目栽培する必要があります。また、最近のトレンドとして、飲食店への出荷があります。飲食店としても地元産の農産物を使用することは大きな PR になります。

今後の都市農業の発展に向け、「農地を核とした農業ビジネスの展開」や「販売チャネルと消費者の選択の自由」、「加工による新たな付加価値の創造」が重要になると思います。



岩澤 正和 / 練馬

ピッツェリア ジターリア ダ フィリッポ 代表

私は、その土地の風土に合ったその土地にあるレストランが大事だと思っています。食文化は地元住民が生活する中で、それを誇りに思うことにより形成されるものです。地元で食材を栽培する農業者さんと食文化は一心同体であり、飲食業もまた同様であると考え日々取り組んでいます。飲食店は食材を理解することでより美味しい料理を作ることができ、これは農業者さんとの距離に近い都市農業ならではの強みです。これは消費者にとってもメリットになります。



佐藤 公明 / 練馬

株式会社あわ惣兵衛 代表取締役

私は、練馬の栗を「江戸栗」と名付け、栗のペーストを使用した和菓子を販売しています。多くの方々に知っていただくため、区内の和洋菓子店と協力して「練馬江戸栗プロジェクト」という取組も行っています。生産者が栽培・収穫したものを加工し新たな付加価値を生み出して消費者に販売できるようにやりがいや責任を強く感じています。商人として生産者と消費者の懸け橋としての役割を果たすことが重要であると思っています。



山口 卓 / 練馬

区内農業者・東京トマト養液栽培研究会会長

私は、ヤシガラ養液栽培という方法でトマトの栽培をしています。収穫物の 8 割を自宅前の直売所で販売し、その他、JA 東京あおばの直売所や岩澤氏のレストラン、福祉作業所、仲卸業者に出荷しています。また、ファーマーズマーケットで仲間と共に出店し農園の PR をしています。

また、農福連携にも取り組んでおり、就労継続支援 B 型の事業所へ作業委託し、精神面に障害のある方 2 名に、収穫や下葉欠き、脇芽取り等の作業をお願いしています。作業能力に個人差はあり、難しい点もありますが、彼らは非常に真面目に作業をしており、将来的に就労したいという想いもしっかり持っているため、今後も引き続き雇用していきたいと思っています。



渡邊 幸浩 / 京都

京都市農業協同組合青壮年部部长

私は、京都市山科区で農業を営んでおり、生産から販売までを直接行う「振り売り」という販売方法を行っています。京都では、歴史文化の上に農業が成り立ち、職業的な面と共に、地域に根付いた文化という大きな一面を持っているのが特徴です。



リズ・ヌーマーク / ニューヨーク

グレイト・パフォーマンシーズ CEO 兼カチキー・ファームおよびシルビア・センター創設者

ケータリング会社である「グレイト・パフォーマンシーズ」に野菜を提供するためにニューヨーク郊外に「カチキー・ファーム」を創設しました。ここは子どもたちに健康的な食について教育する団体「シルビア・センター」の拠点でもあります。

農産物は全てオーガニック認証を受けています。農産物は CSA（地域支援型農業）※で市内にも供給していましたが、近年、野菜のオンライン販売も増え CSA に依存する人が減ったことが 1 つの要因です。そこで我々は、会員のロイヤルティを繋ぎとめるために会員限定で農園に招いて料理を提供するようなイベントを定期的に開催し、付加価値を創出する努力や、会員のニーズに応える工夫も行っています。

また、「シルビア・センター」では、若いうちから生涯にわたって役立つ健康的な食習慣を身に付けてもらうため、「全てが台所からスタートする」を信条に活動をしています。農場への訪問や調理等の体験を通じた教育・食育が重要であると考えています。食卓に集まって皆で食を囲むことほど力を持っているものはなく、「食を中心として人生が回っている」と考えています。今後も都市農業と結び付けた新たな取組を実施していきたいと思っています。

（※「CSA」とは、生産者と消費者が連携し、前払いによる農産物の契約を通じて相互に支え合う仕組み）



マーク・アインズバリー / ロンドン

大ロンドン庁 再生経済部門 食料政策係長

私は、市民にとっての「食料」を豊かにするため、食料政策プログラムの実施に取り組んでいます。多くの農地は開発保護地域であるグリーンベルトにありますが、物理的・心理的・流通的課題により、中心地までの農産物供給が十分にできない状況があるため、市場への供給の新しい方法や代替的な流通経路を検討する必要があります。この状況を踏まえ、私の発表では 3 つの農園における事例を紹介します。

1 つ目の農園では、ボックス・スキーム※による出荷のほか、レストランと契約を結び 250 種ほどの農産物を出荷しています。また、多くのボランティアが農作業に参加し、コミュニティ構築や就労支援にも役立っています。2 つ目の農園では、地元住民が庭や市民農園で育てた野菜をボックス・スキームの中に入れて販売しています。これは地域社会の育成にも貢献しています。3 つ目の農園は、点在した農園を運営する団体の事例で、遠方の人々にも農産物を届けられるよう卸売倉庫を建て、農産物を集約できるようにしました。さらにこの団体は、農業者が栽培前に契約できる仕組みのため安心で公正な取引ができます。これはグローバルな供給チェーンからマイナスの影響を受けないようにする考えが基になっています。また、利潤追求の資本主義的な考えに捉われず、栽培活動による環境への配慮や公正な価格による取引等に関する「フード・ゾーン」という概念をつくりました。さらに、フードバンクへの貢献活動も実施しています。

ロンドンでは、2019 年 2 月から交通機関におけるジャンクフードの広告を禁止しました。食育の観点から、新鮮な野菜や果物を食べてより健康的になってほしいという想いから実施しました。今後も、生産者にとって公正で、かつ消費者にとってもより良いフード・システムに変えていきたいと思っています。

（※「ボックス・スキーム」とは、その土地で有機栽培された新鮮な野菜を箱詰めして直接近隣住民に届けるシステム）



ラティファ・アブドゥル・ソマド / ジャカルタ

南ジャカルタ市 都市農業者団体 代表

元々、私の住んでいる地域に農地はなく、枯渇し小さく狭い路地があるだけでしたが、2017 年から「ガンヒジョウ（緑の路地）」という事業をジャカルタ州政府の支援を受けながら始め、私はその責任者を務めています。生活空間である路地の壁や柵などを有効活用して、ポット栽培や水耕栽培で野菜を栽培するものです。これは地域住民が協力し合いながら活動しています。収穫物は自家消費もしますが、市場やバザーでの販売もしており、消費者のニーズに合った加工品も工夫しながら販売しています。このようなジャカルタにおける都市農業は、広大な土地を必要としない点や、新鮮な野菜を低価格で入手できる点、世帯収入の増加、都市化による大気汚染の改善、環境・景観の保全等の多くのメリットがあるため積極的に行っています。

また、幼稚園生から大学生まで幅広い年代の方に対して、水耕栽培を使用した農業学習などの教育活動も行っています。今後もより良い都市の発展のためにも、都市農業を活かした取組が重要になると 생각합니다。現在は、ジャカルタ州政府が掲げる「生産性のある緑地 30%」という目標の実現に向け貢献していきたいと思っています。



カン・ハンソン / ソウル

江西農業協同組合 農業指導者ソウル特別市連合会 西部地区会長

私は、ソウル特別市江西区で稲作やイチジク、果物・野菜の栽培のほか、週末農園を営んでいます。稲作においては、昨年から無農薬栽培をはじめ、収穫のほとんどを学校給食に出荷しています。これまで学校給食への食材の供給元は固定的で出荷の余地がありませんでしたが、政府と協議した結果、「市内で生産された農産物は市内で優先的に販売すること」という法令が制定されたことにより、学校給食への出荷ができるようになりました。しかし学校数に対し生産量が足りていない点が課題です。無農薬米は需要が高く、政策的にも推進されているため、農業ビジネスとしての将来性もあり、今後増えていく見込みです。

イチジクや果物・野菜の販売経路については、農協を通じてローカルフード店への出荷や、週末農園の使用者への直接販売をしています。今後は、栽培面積拡大に伴い様々な作物の栽培や、直接販売の消費者層の拡大等をしていきたいと思っています。

また、農業における生産や質も大事ですが、畑にコスモスやヒマワリを植えて、子どもたちに見せるのも都市農業の 1 つの形だと思っていますので、様々な形で都市農業を発展させていきたいと思っています。



ロンダ・テイテル＝ペーン / トロント

NPO トロント・アーバングロワーズ コーディネーター

私が所属するトロント・アーバングロワーズは、行政や農業者、都市農業に関わる組織等に共通する課題（土地の確保・情報交換・地域的格差等）を解決するために作られた NPO 法人です。取組の 1 つに、都市農業が与える経済的・社会的・環境的・健康的影響を測定するための指標づくりがあり、都市農業の重要性を調査しています。

市内にある営利企業の「フレッシュシティ・ファーム」では、有機農産物を CSA や加工品にして出荷する一方、新規就農希望者の支援も行っています。

また、食料組織である「フードシェア」では、学生を栽培に関与させた教育や栄養プログラムを展開しながら、循環経済をモデルとしたファーマーズマーケットの開催もしています。

「農園での作業は常に足掛かり」であると思っています。社会的課題の解決に繋がる一歩となるのが農業であり、その一歩からステップアップして多様な課題解決に繋げることができると思っています。都市農業を活用して、コミュニティの課題や気候変動への対策等を実践することが重要です。

分科会②

テーマ

都市の農業を活かした コミュニティづくり ～農的活動による社会的課題解決を目指して～

分科会②では、練馬区の都市農業を通じて区民が得られる多様な機能（教育や福祉、まちづくりなど）と地域コミュニティの形成にもたらす効果を明らかにしていきます。また、海外の都市における市民自らが耕作する多様な農的空間（コミュニティ・ガーデンや菜園による都市緑化など）の創出とそれらを通じて社会的課題の解決に取り組んでいる状況を学びます。さらに、それらの活動を支える非営利組織（行政と市民組織のマッチングやネットワーキング、パートナーシップの構築）のあり方、行政によるフードシステムにおける農地や農的空間の位置付けなどについて学び、それらを通じて都市住民（練馬区民）の都市農業への理解と関心を高めます。

パネルディスカッション



ジェームズ・グーンズ氏
トロントにおけるコミュニティ農園を活用した
社会的課題の解決について



加藤義松氏
農業体験農園（緑と農の体験塾）での
取組やその効果について



ネヴィン・コーエン氏 / イ・チャンウ氏



ディア・メイディアンティ氏



安藤文将氏



栗秋俊彦氏



伊藤雅史氏



サラ・ウィリアムズ氏

ディア・メイディアンティ氏 「ガンヒジョウ（緑の路地）」の紹介



政府支援のもと、生活空間の路地で水耕栽培やポット栽培を行う取組です。地域住民が協力して栽培し、新鮮な野菜を低価格で供給できる点や環境保全、コミュニティづくり等の多くのメリットがあります。

サラ・ウィリアムズ氏 「キャピタル・グロウス事業」の紹介



2012年のロンドンオリンピックを契機に、ロンドン市内に2,012か所のコミュニティ農園を創出する取組である「キャピタル・グロウス事業」について紹介しました。「クランブルック・コミュニティ農園」では、引きこもりがちであった高齢の男性（写真中央）が、過去に市民農園で活動した経験を活かして、主体的に関わりを持つようになった事例について説明しました。

座長による総括



井原 満明

株式会社地域計画研究所 顧問・取締役

都市農業というのは幅広いものです。実は分科会の打ち合わせの中でも、今回お招きしている都市における都市農業の事例を見て、これは農業と言えるのだろうかという議論もありました。しかし、議論を深めていく中でどの都市も共通して、農業を通じていろんな社会的な関わりを持っているということが分かりました。単に、農業の形態だけではなく、多様な都市農業をどのように考えていくのか。多様性を持っているという事は一歩間違えるとバラバラになってしまいます。しかしその多様性の中で、コミュニティというものがひとつの方向性となるのではないかと思います。

また議論を通して、小規模で分散型の都市農地をどのように活用していくべきか、都市農業に関わる人たちをどのように増やし組織化していけば良いのか、それらを支えていく上での仕組みづくりや役割についてどのようにすれば良いかといった課題が挙げられました。これらを踏まえて、都市農業の未来をどのようなものにしていくかを考えていくことが重要だと思います。

分科会② 事例発表概要



加藤 義松 / 練馬

区内農業者・(特非) 全国農業体験農園協会理事長

都市農業は長い歴史の中で大変な逆風が吹いていた時代がありました。バブル景気が始まり土地の価格が急激に上昇しました。「土地が値上がりするのは農業者が土地を手放さないからだ」と批判され、長い間厳しい環境下で農業経営を行っていました。世論を味方にしないと私たちは生き残れないと心に刻まれた出来事です。以来、農業者が近隣住民を意識した経営に移行していきました。

都市農業には交流創出、食育・教育、環境保全等6つの多様な機能があると言われています。その全ての機能を1つの農業体験農園で実現できる仕組みになっています。また、苗・肥料等が用意され農業指導もしてもらえするというハードルの低さから、利用者の年齢層は幅広いことも特徴です。運営する農業者も所得が増えるだけでなく、人から感謝・評価されることでやりがいにつながる効果もあり、練馬から始まった農業体験農園が全国に広がり400園にもなっています。



長島 良介 / 練馬

農業体験農園利用者・前練馬区教育委員

私は加藤義松さんの農業体験農園を長年利用しています。農業体験農園が私にもたらしてくれたものは、農業の体験だけではなく、人と人とのつながり、リフレッシュの時間、食に対する意識改善など多くのものがあります。都市では、地域における人間関係性が希薄になりがちですが、農園の利用をしてから地域との関わりが深まり子どもの学校のPTA会長や地元の消防団の活動などを行うようになりました。今の私の人生を大きく変えたきっかけとなっています。



村山 純子 / 練馬

農業体験農園利用者・「野菜のおすそわけプロジェクト」世話人

農業体験農園と子ども食堂をむすぶ、野菜のおすそわけ活動を行っています。農業体験農園では食べ切れないほど野菜が多くできる時期があります。皆さんから余った野菜をいただき、子ども食堂などに寄付する活動が、野菜のおすそわけ活動です。野菜を生産して提供する役割と並んで大きな意味があると思うのは、同じ地域にありながら出会うことがなかった市民活動団体が、農業体験農園で出会い、繋がるきっかけになっているということです。農業体験農園は、地域の人と人、活動と活動を

繋ぐコミュニケーションの場としてまだまだ大きな可能性を秘めています。



ネヴィン・コーエン / ニューヨーク

ニューヨーク市立大学大学院 公衆衛生学専攻 准教授

都市農業には単なる食料生産以上の便益があります。都市農業の活動を測定し我々の受益を定量化することが重要です。便益の1つとしてはコミュニティの結束、健康や福祉と言った社会的発展が挙げられます。実施した調査では農園があることによって住環境が良くなり、農園活動の参加をきっかけに他の活動に参加しようと思った人が増加しました。これはコミュニティの結束が高まっていることを示しています。

経済的発展における便益もあります。都市農業を活用した雇用研修では、リーダーシップ研修や料理研修があります。このような訓練を通じ多機能的技能が向上し、修了したほぼ全ての人が正社員就職もしくは学校へ入学しています。そして現在、ニューヨークでは室内や屋上で行う新分野の都市農業ビジネスが盛んです。

また、ソーシャル・ジャスティス（社会的公正）を教育する手段としても有益です。ある事業では、学校と連携し水耕栽培の施設を作ることを目的にしつつもそれだけでなく、自分たちの地域はなぜ貧困なのか、どんな政治的な関与が必要なのか、どのように変えていく必要があるかを学ぶべきかを若者へ教育しています。

世界の都市には大きな違いがあるにも関わらず、都市農業の現状には多くの類似点があります。社会的にどういった便益があるかを証明できる情報データを世界的に共有できたとしたら、都市農業の推進において大きく前進できるのではないかと考えています。



サラ・ウィリアムズ / ロンドン

NPO サステイン プログラムディレクター

ロンドンには、住宅の価格高騰、不健康な食文化による子どもの肥満、不平等や格差による貧困層の拡大、人々が孤独感を抱えているといった問題があります。そのような問題を受けて私の所属するNPOサステインでは、コミュニティによる食料栽培という活動を行ってきました。そして、オリンピックが開催される2012年末までに2,012か所の新しいコミュニティ農園を作るという壮大な計画を立ち上げました。当時、自分の食料を栽培するという関心が高まっていたにも関わらず土地が十分に

はありませんでした。どれだけの土地、人を食料栽培のために活用できるのかといったことを確認し、また、貧困を抱えている人たちにも焦点を当て、多様なコミュニティに対し食料栽培を通して教育の機会を与え犯罪の根本原因に対処したいという思いがありました。住民の80%が私たちのネットワークに関与していると言われています。

活動に参加する理由は、健康や福祉のため、より良い住環境を得る、コミュニティ内での発展を目指すためと多様です。そして、この活動に参加して近隣住民との絆が強まったと多くの人が感じています。私たちの取組では「包括的であること」を大切にしています。一緒に食料を栽培することで、人々が繋がることを目指しています。都市農業というのは非常に多様で、様々な性質を包含しています。幅広い人たちが関わり、生産的な栽培システムから単純な箱で何かを育てているものまで含むその幅広さこそが強みだと思っています。これを今後どのように評価して異なる人たちに発信していけるのかということを考える必要があると思います。



ディア・メイディアンティ / ジャカルタ

チトラ・ナガ・チュムルラン社 植物防疫研究所長

都市農業を実施している理由にはジャカルタが抱える多くの問題が背景にあります。急速な人口増加により食料需要が高まる一方、土地が転用され農地が大きく減少しています。また、地盤沈下も進行しており、気候変動や災害に対して脆弱です。そこで、都市農業を通じ、安全な食や食料需要を満たし、また、汚染の悪化等が深刻な環境問題に対し、コミュニティを強化することで環境維持に繋がっています。

ジャカルタでも東京と同様に、地域住民間のコミュニケーション不足が問題でしたが、ガンヒジョウ（緑の路地）を推進することによって、近隣住民と一緒に野菜を育てることで交流が盛んになってきています。ガンヒジョウは毎年160か所程度増え続けています。参加するメンバーも1か所15名程度で、行政職員が2年間講習会を行う等の支援を行っています。水耕栽培技術を活用することによって、狭いところでも沢山の野菜を植えることができます。最近では自分たちの食料としてだけでなく、販売目的としても成り立つようになってきました。



イ・チャンウ / ソウル

韓国都市農業研究所長

ソウルでは、都市農業を「都市にある建築物や土地など多様な空間を活用した農業活動である」と定義しています。そして、特に重視する都市農業の機能があります。まず「コミュニティ形成」です。5人以上の市民が集まって農地を確保できれば「都市農業共同体」として登録され、市から色々な支援を受けることができます。2011年に4万4千人だった都市農業の参加者がこの7年で63万人まで増えました。次に「雇用の創出」です。都市農業は趣味・余暇であるのと同時に、雇用創出のチャンスであると言われています。金融も保険も、世界の経済はあまりにも不安定であり、農業こそがソウルの未来を担う主力産業になると考え、行政は多額の予算を投入しています。最後に「教育」です。規模は小さいですが、ソウルの小・高校のうち、多くの学校に学校農園があります。都市農業は、持続可能な都市づくりに貢献し、高齢化社会に適する手段として期待されています。

今、ソウルでの最大の争点は、都市農業を主導するのが行政なのか市民なのかということです。これまで行政主導で質より量を重視していたと言われています。急激に拡大することはできましたが、様々な課題も抱えています。そこで最近では、市民主導である必要があり、そこで初めて公共性や創意工夫も確保されるのではないかという意見が出てきています。



ジェームズ・クーンズ / トロント

NPO トロント・アーバングロワーズ コーディネーター

都市農業は、トロントにおいて重要な役割を果たしています。特に社会的なつながり、リーダーシップ能力の向上、環境保全にも役立っています。「マシュキキイ；アキイン」というカナダの先住民の人たちのための農園があります。トロントに住んでいた5万人以上の先住民のうち3千人以上がホームレスになっており、薬物乱用なども深刻な社会問題になっています。ここでは、彼らにとっての神聖な薬草である、杉やセージ等が栽培されています。この事業はSDGs（持続可能な開発目標）に沿っており、飢餓を終わらせること、健康な生活を保障し福祉を促進すること、十分に安全な住宅を提供すること等に寄与しています。

都市農業は、単に食料を栽培するという以上のものです。人々を地域コミュニティに包摂し、新しい技術を学ぶことができ、市民に力を与え、まちをより緑化することができます。そして、重要なことは、次の世代の農業者を育てることができるということです。

私たちNPOが活動することは必要ですが、それだけでは充分ではありません。やはり市民の活動家も必要で、彼らが明確に政治家に声を届けるということも重要だと思います。そして、都市農業が多様性という点で貢献でき、社会にとって必要なサービスであると見られることが重要で、社会にとって価値あるものだと思わなくてはならないと思います。

分科会③

テーマ

都市における農を活かしたまちづくり

～都市に農を埋め込む戦略と政策～

分科会③では、各国・各都市固有の状況について理解した上で、共通点を把握します。
その上で、都市農地を、都市や地域に残し、埋め込み、広げる戦略と政策的対応や支援策について、

- 1) 都市計画／ランドスケープデザインにおける新しい取り組み
- 2) 都市における農を通じたコミュニティ形成の側面
- 3) 都市における新しい農ビジネスの広がり

などを手掛かりに考えていきます。

政策的対応、支援策としては、都市計画制度、土地税制の優遇、政府財団等によるコミュニティ形成に関する補助金、中間支援組織等による支援、などが想定されます。

パネルディスカッション



アンドレ・フルヨン氏
白石農園の農地デザイン案等について



ソニア・ディール氏
TRCAが実施する都市農業の事例について



飯田晶子氏



タウフィク・ユリアント氏



白石好孝氏



ピロ・ロッサン氏/アンドレ・フルヨン氏



山口忠志氏

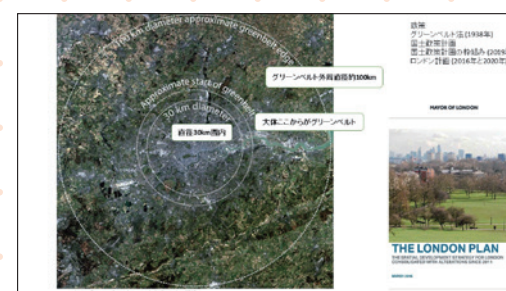


武田直克氏



ソン・インボン氏

アンドレ・フルヨン氏 グリーンベルトについての説明



写真で示されているとおり、ロンドン都心から直径30km圏内にビルが建てられ、その周りはグリーンベルトとして合法的に保全すべき地域が広がっています。これまで、グリーンベルトは維持するべきか、開発するべきではないかといった議論が多くなされ、最近になって緑ある土地として維持されるべきと決まりましたが、農業に重点が置かれたわけではないと語ります。

ソン・インボン氏 都市農業推進事例の紹介



ソウルでは、市民主導による余暇やヒーリングを目的とした都市農業の事例が多いなか、このスライドでは、都市農業の福祉分野への活用に関する事例を紹介しています。いわゆる「農福連携」を実施し、様々なアプローチによる都市農業の活用に取り組んでいます。

座長による総括



小泉 秀樹

東京大学 まちづくり研究室 教授

各国の取組には様々な相違点がありましたが、都市農業を進める上で様々な主体との連携が欠かせないという点は各都市で共通していたと思います。ソウル・ジャカルタ・ニューヨークの事例は、市街地の空き地や建築物に、コミュニティ・ガーデン等農業施設を非常に積極的に作っていることが印象的でした。農業者が中心となって農業を守り育てていくのが練馬のスタイルですが、地域住民とうまく連携して農業を展開していくことができれば、練馬でもより一層、都市と農の共生が実現できるのではないのでしょうか。このとき重要なことは、土地利用政策を位置付けていくということです。例えば、トロントのソニアさんのような組織できちんとしたイノベーションを実施していますが、自治体が都市的な視点を持って点的な都市農業や今後のコミュニティベースの農業機能をどのようにしていくのかといったことを、地球温暖化の問題も絡めて考える必要があると思います。こういったことを実現するためにも、各都市で積極的に学校と連携をしていました。例えばソウルでは多くの学校において学校農園があり全生徒が触れる機会がありました。このように、教育と都市農業の接点を強化していくということも、政策的な実現において大切だと思います。

また、ソーシャル・ジャスティス（社会的公正）やヘルシー・フード（健康的な食）といった社会的包摂の問題や価値も、意識しながら実践し、より多くの人を巻き込んでいくことが大切です。都市農業を社会制度の中にどのように位置付けるかということも、社会的役割に十分配慮しながら取り組むことも大切であると思います。

分科会③ 事例発表概要



白石 好孝 / 練馬

区内農業者

私の家は、江戸時代から代々練馬の地で農業を営んでいます。数十年前から、かつて農村であったところが徐々に宅地化され都市住民が増えてきました。そうすると、畑の埃やトラクターの騒音で、苦情や空き缶を投げ入れられる等小さな溝が生まれてきました。その中で、農業者も徐々に地域に寄り添っていける農業に転換しなければならないという考え方に変わってきました。かつては市場出荷でしたが直接販売に変え、摘み取り農園や野菜づくりのカルチャースクール「農業体験農園」も行うようになりました。

私たち農業者にとしてみると、徐々に宅地化され都市に農地は必要ないと言われてきた時代から、今は都市農業振興基本法が制定され、都市の中に農地があるべきものとなり、嬉しく思っています。



山口 忠志 / 練馬

公益財団法人練馬区環境まちづくり公社 主任

日本の都市農業は、市街地の限られた空間で展開される生産性の高い農業という特徴があります。歴史の中で、復興や人口増加、それに伴う宅地需要に応える住宅開発が進み、練馬区の土地利用も大きな変化を求められるようになりましたが、その中でも練馬区の農業者は、地域の暮らしと共に生きてきたということが、現在の農地・農業が残っている大きな要因だと思います。

高松地区では農の風景の保全・育成を目的とする「農の風景づくり」という取組を進めています。農業者だけでなく、豆腐屋さんやまちづくり団体、大学、行政等多岐に渡る人々が一緒にまちづくりに関わることでその地区の面白さと発展に繋がっています。



ビル・ロサッソ / ニューヨーク

ニューヨーク市 公園局グリーンサム部長

私が担当するグリーンサム農園は市内に 600 園あり 2 万人のボランティアが運営しています。1970 年代、財政危機により建物や土地が荒廃したため、地域の人々が空き地を整備しコミュニティ農園を作り始めました。行政がやらなかったことを市民がやるというアクティビズムがニューヨークの都市農業の特徴だと思います。

市内には農園が約 2,000 か所あり、その 95% の農地が公有地です。また、ニューヨークの都市農業は多彩です。運営主体は行政、企業、NPO であったり、目的が食料生産のこともあれば、景観や子どもたちへの教育、利潤が目的であったりと様々です。ニューヨークの土地規制は、農業専用の区域がないので、どこでも行うことができ大変許容的なものとなっています。しかし一方では、農業を発展させるための計画がないということでもあります。

私たちは今、都市農業というものを受け入れ未来を見据えています。都市農業が来世紀どのような形になるのか、都市の景観などはどうなっていくのか、バランスを考えることが重要になってきます。農産物の生産、住宅、環境保全、貧困対策他の土地利用をどうするのか、意思決定の影響が出てくるのには時間がかかります。そのため、意思決定をする際にはできるだけ多くの人々が参加して正しい方向に進めていきたいと考えています。



アンドレ・フルヨン / ロンドン

ブライトン大学 建築学専攻 教授

ロンドンの外周にはグリーンベルトが広がっていますが、ロンドンでは「キャピタル・グロウス事業」といった市の中心部の都市農業活動に焦点が当てられています。そして、ロンドン市街地の緑地に関して「グリーン・グリッド」という考えがあります。街中にある緑地は連携すべきというもので、とても興味深いものです。法的な規制はないものの、手引きが作成され市の支援があります。しかし、つながりを作るというのはそう簡単ではありません。土地は個人が所有者であることが多いですし、空き地も少なく、色んなものが散って位置しているからです。しかし、つながりといっても色々なやり方があると思います。物理的なつながりではないかもしれないし、細いところがあるかもしれない。それでも、何か視覚的につながりがあるような雰囲気を出すことが大事だと思います。

練馬での視察の際、木々が富士山の方に向かって街道沿いに植えられていた風景が印象的でした。そのような連続的な生産景観を作るということです。練馬の農地は農住混在で、農業体験農園や自動販売機等農地での活動はすごく充実していますが、農地から 1 歩出て住宅地とどう繋がり、どうネットワークを作っていくのかということについてはまだできることがあると思いました。



タウフィック・ユリアント / ジャカルタ

ジャカルタ首都特別州 水産農業食料安全保障局 農業部 都市農業課長

ジャカルタ州政府は都市農業に対する関心が非常に高く、支援策に対してかなり力を入れています。具体的には州知事令を出して行政主導という形で行い、そして関係するステークホルダーの人たちも一生懸命活動しています。2016 年以降、500 か所のガンヒジョウ（緑の路地）を積極的に作っており、2030 年までに、州の土地の 30% を緑地にする政策を掲げています。また、市民に対する植物の種苗の無料配布も行っています。

また、ジャカルタの都市農業の特徴は、新しくコミュニティを形成する取組を行っていることです。例えば、現在、200 人の若者のグループを育成し、また主婦層をターゲットにして農業に関わってもらうことをしています。試験的に農業をやってみたい人たちのために農地も準備しています。ジャカルタで行われる都市農業の場所は、建築前の私有地がほとんどですが、やはり年々そういった未利用地は減ってきています。そのため、小さな路地や建物の屋根等小さな空きスペースでも些細な機会をとらえて、市民に何かを栽培してもらうことを勧めています。また、情報システムを構築することで種苗園、観光農園、農業振興センターなど農業関係全ての施設がどこにあるか分かるようにしています。



ソン・インボン / ソウル

ソウル特別市 経済政策室 都市農業課長

ソウルの都市農業は利潤追求を目的とする農業と、農業の価値や重要性を市民に広める農業に大別できます。都市が産業化すると殺伐とした都市になってしまいます。そのような中で、どのようにしてコミュニティを構築し、農業の重要性や価値を市民に理解してもらえるのかという課題が出てきました。それに加えて、生物多様性や土壌の保全、共同体、福祉といった価値の全てを、1 つにまとめて市民に伝える力を持っているのが都市農業です。

ソウルの都市農業は、ソウル市民の誰もが農業を実践できます。農業の役割を理解して初めて農業の発展に寄与できるので、教育的価値を高めるため多くの学校に農園を設置しています。また、ソウルにはとても有名な梨の生産地がありますが、かなり少なくなっていました。そのため 50 軒の梨農家を文化遺産に指定し恒久的に保全するようにしました。高齢化社会を迎える中、従来の産業としての農業をどのように守り後世に継いでいくのかを考え、積極的な取組を行っていることもソウルの都市農業の特徴です。

ソウルは都市化により都市に農地を残すことができませんでしたが、練馬には都市の中の農地が残り、都市と農が共存しているのを見て大きな感銘を受けました。ソウルでも政策として、都市農業が日常化されるような空間を確保し、都市農業が産業として発展できるようにしていきたいと思っています。



ソニア・ディール / トロント

トロントおよび地域保全局 (TRCA) ハンバー川・都市農業プログラム 事業担当課長

私が所属する TRCA は 30 を超える自治体と共に取り組み、天然資源の保護・回復に努め、回復力のある地域コミュニティを作るという目的を持っています。そのため、自治体の範囲にとらわれない広範囲で、他組織と連携し多様な事業を実践できることが強みだと思います。

TRCA は現在、トロント地域において最も広大な土地を持つ組織です。1940 年に洪水管理と浸食制御のために土地を獲得したところから始まり、以来、私たちは都市農業とコミュニティとの関係を築いてきました。都市農業プログラムを導入した理由は、沢山の利点があるからです。環境的、社会的、コミュニティの経済的発展にも役立ち、新しく多様な作物を栽培することで文化的かつ多様性が向上し、コミュニティの一体感を生むことにも繋がります。2008 年に持続可能な近郊農業政策を導入し、TRCA が所有する農地をきちんと維持することができるようになりました。都市農業プログラムは、最長 5 年間の新規就農者への農地貸し付けやインフラ改善、温室設置、資金提供の支援等です。

さらに、私たちの活動はコミュニティ・エンゲージメント（社会貢献）に関して非常に良い影響を与えています。食料がどこから来ているのかということについて人々の意識を改善し、現在トロントにおける大きな運動になっています。

シンポジウム

テーマ

都市農業の未来を語る ～私たちの暮らしと社会をいかに豊かにできるか～

シンポジウムでは、異なる自然環境、歴史や文化、制度を背景にして、各都市の食や農地・農業の現状は異なり、世界都市農業サミット参加都市の抱える問題も多様です。しかし、社会や経済の世界的規模での共通する変化によってもたらされた課題に対応し、人々の暮らしと社会を豊かにし、持続可能な都市をつくるために、都市の中に農地・農業を保全し、また再生させ、望ましいローカルなフードシステムを作るという世界の都市が目指している取組には共通性が大きいのではないのでしょうか。

そのような状況を念頭に本シンポジウムでは「都市農業の未来を語る～私たちの暮らしと社会をいかに豊かにできるか～」をテーマとし、これまであまり紹介されてこなかった世界の都市農業の現状や取組について、情報を交換し大いに学び合いました。



開会挨拶
前川耀男区長



事例発表

ビル・ロサソン氏



白石好孝氏



事例発表

サラ・ウィリアムズ氏



サミット
宣言発表の
様子



サミット宣言を読み上げる
後藤光蔵氏



パネル
ディスカッション



練馬区 都市農業課長 毛塚久

ビル・ロサソン氏 多様な主体や目的で行われる都市農業の事例紹介



ニューヨークで行われる都市農業の目的は様々で、あらゆる主体により都市農業が活用されています。行政やNPOが実施する農園では、新鮮で安全な食料の供給からはじまり、景観・環境保全、コミュニティの課題解決、教育等を目的とする事例が多く、企業により屋上や屋内で運営される商業的な事例もあります。

白石好孝氏 練馬における都市農業の事例紹介



練馬区は農園天国！
●農家が運営する農業体験農園が17農園（約1800区画）
●練馬区が運営する区民農園等が26農園（約1700区画）
合計 約3500区画
その他にも「A」が運営するレジャー農園や老人クラブ農園などがあります

座長による総括



後藤 光蔵
武蔵大学 名誉教授

シンポジウムの座長を務める中で感じたことを2点お伝えし総括としたいと思います。1点目は、世界の各都市が異なる条件下で、農地を保全、創出しながら農業生産を行い、貧困や社会的孤立、環境問題等の都市の抱える多様な課題解決に向けて、大変な努力をされていることが明らかになりました。発表いただいた各都市の取組は、互いに参考になり、それぞれの都市で新たな発想で実践できるヒントも得られたのではないかと思います。

また、聴講された練馬区民の皆様も、世界の各都市では新たに農地を創出しながら、努力して都市農業を実現させている状況と比較して、練馬では身近に農業者がいてくれて、気軽に農に触れることができる環境があることに有難さを実感されたと思います。

2点目は、これまでの都市農業の取組というのは、新鮮で安全な農産物を供給することから始まり、都市の抱える課題の解決に広がっていきましたが、そういった都市農業の取組は、世界的規模の課題解決に向けた取組の一環でもあるということです。

国連が定めた「持続可能な開発目標（SDGs）」の17の目標の中でも、格差や飢餓の解決といった貧困問題と地球環境問題は非常に重要で緊急課題であると位置づけられていますが、これは、都市農業が取り組んでいる課題と密接に関係しています。貧困問題は都市でも深刻化していますし、グローバル化した都市のフード・システムは地球温暖化を招いている一因でもあります。

都市にとって望ましいフード・システムを持続可能なものにしていくことを考えたときに、これまでのグローバル化したフード・システムについて再考し、近郊や国内外の農業者との新たな結び付きを模索し考えていく必要があると思います。これは、家族農業経営を重視しようという国連の取組にも関連してきます。このような観点からも、都市農業の抱える問題というのは、個人の問題から広がって都市問題の解決、さらに広がって地球規模の問題に繋がる取組に結びついていると感じました。

世界の行政や研究者、NPOといった都市農業関係者が集まるこれほど大規模な国際会議は、日本で初めての開催でした。都市の成り立ちや文化が異なる世界の都市が集まり、同じ方向を向いた議論ができるかどうか、準備段階では大変危惧していましたが、実際は大変実りあるものにできたと思います。今回のサミットが今後の各都市の交流や都市農業の発展の出発点となることを願い、最後のまとめとします。

シンポジウム 発表概要



白石 好孝 / 練馬

区内農業者

皆さんの都市農業に対する情熱が印象的でした。高い意識と理想を掲げて取り組まれていることに敬意を表したいと思います。特に、気候変動や環境問題、食の安全、コミュニティの問題に対する取組の重要性を改めて確認できました。

そして、市民活動や NPO、NGO、中間支援団体といった様々な方々の尽力によって、都市農業が営まれていることも分かりました。経済的な効率性を優先して考えたとき、都市に農地は不要といった声も上がりますが、環境や食料、教育、福祉といった面で、都市の生活をより豊かにするために、都市農業の必要性が見えてくるのではないかと感じました。

また、共に力を合わせることが大切であると思いました。私たちは、行政や JA と共に都市農業を育んできました。皆さんもそれぞれの地域の中で、様々な人脈を持ちながら力を出し合い協力して活動されていることが、非常に大切なことであると改めて実感しました。

都市に農業・農地があって良かったと感じた地域の皆さんには、都市農業をどんどん利用していただき、農業者もそこに生きがいと誇りを持ち、都市農業を通して私たちの暮らしと社会がさらに発展していけたら素晴らしいと思います。



毛塚 久 / 練馬

練馬区 都市農業担当部 都市農業課長

皆さんのお話を伺って、農業は都市に必要なものであると実感しています。良質な食、文化・歴史への回帰等といった話もありましたが、農業は人や生き物の命を育むものであるからこそ、各都市において、様々な場面で誰かが関わることでできる取組が展開しやすいのではないかと感じています。

各都市の事例発表では、NPO やボランティアがコミュニティ農園等を運営され、各都市特有の課題解決に向けて尽力されているとのことでした。都市農業を活用した公正な社会づくりに取り組んでいるということだと受け止めましたが、これはまさに練馬の農業者がこれまで実践してきたことそのものではないかと感じています。是非、練馬の農業者がこうした社会的な役割を果たしているということを区民の皆さんにも改めて知っていただきたいと思います。

都市における実情が違っていても、皆さんの都市農業に対する強い想いは共通であることを知ることができ、大変心強く感じました。今回のご縁を大切にしながら、今後も共に取り組んでいきたいと思います。



ビル・ロサッソ / ニューヨーク

ニューヨーク市公園局 グリーンサム部長

都市農業が練馬のくらしの中で根付き、素晴らしい農業の歴史があることも知りました。また、地域が都市農業を受け入れていることは、世界が学ぼうとしているものや我々がそれぞれの地域で作り出したいと思っていることであり、既に練馬は持ち合わせていることが分かりました。例えば、地産地消や安全ですぐに手に入れられる食料を地域中で実現させたいと我々は思っていますが、それが練馬には既にあります。ニューヨークのコミュニティ農園を今後どのように発展させていくか考えたときに、「練馬の都市農業は、いわば私たちが目指すべきモデルである」と言えます。

さらに他の都市から学んだことは、それぞれ違った視点や考え方を持っていることが印象的でした。それでも、より一層持続可能な都市を目指している点やコミュニティに焦点を合わせている点はどの都市も共通していました。第一義的には食料を生産することですが、住民をどのように参加させるかについてそれぞれがしっかり考えています。消費者や市民に、もっと積極的な役割を果たしてもらう必要がありますし、食料システムや政策についてもっとコントロールできるようにすることが大切だと思います。



サラ・ウィリアムズ / ロンドン

NPO サステイン プログラムディレクター

練馬では、農業の伝統に誇りを持ち、何世代にもわたり農業を大切にされ農業の伝統が根付いていることに感銘を受けました。農業体験農園や庭先の自動販売機は素晴らしいアイデアだと思います。消費者に直販することができるのは大変価値ある良いことだと思います。

都市農業には方法は1つではなく、様々な着眼点やアプローチがあるということが非常に重要な観点だと思いました。あらゆる食料生産や恵みある便益は、地球にも人々にも提供されています。様々な創造的なアイデアや土地、資産を使って、農業をしていくことが練馬ではできていると感じました。



タウフィック・ユリアント / ジャカルタ

ジャカルタ首都特別州 水産農業食料安全保障局 農業部 都市農業課長

練馬で学んだことは、是非ジャカルタに持ち帰りたいと思っています。例えば、練馬大根引っこ抜き競技大会のように、農業を市民も関われる1つのコンテストという形にしたアイデアが非常に素晴らしいと思います。このような取組を参考にして、子どもの頃から、野菜や果物は農業者が丹精込めて作ったものであることを教えていきたいと思いました。

それから、作物の価格を安定させることは必要であると思いますが、練馬のように新鮮な野菜を低価格で地域の方に直接販売するやり方は大変素晴らしく、ジャカルタでも応用できる点を学ぶことができました。



ソン・インボン / ソウル

ソウル特別市 経済政策室 都市農業課長

一言で表現すると、練馬の都市農業には希望があり将来的にも成功すると思います。私が農地視察をして感じ学んだことは3つあります。1つ目は、生産緑地制度を活用させることで、都市の中で共存できる農地を作っていることです。韓国にもグリーンベルトという開発制限区域を設けていますが、実際には開発が進んでいます。それに対して練馬の生産緑地制度は役割をきちんと果たしていると思いました。2つ目は、高齢化に伴い農業従事者が減っている状況のなか、農の学校を運営して支え手を育成している取組に感銘を受けました。3つ目は、農業の第六次産業化が、世界のどの都市でも取組の大きな核になっているなか、生産・販売・体験・観光までを行うことのできる練馬の農業は、持続可能的であり、必ず成功するものであると思いました。



ロンダ・テイテル＝ペーン / トロント

NPO トロント・アーバングロウワーズ コーディネーター

練馬の農地を視察して印象的であったことは、都市の中に多くの農地がありそれぞれ違った形態を持っていたことです。市街地の中に多くの農地が点在し、それぞれの農地が、摘み取り園や農業体験農園等の異なる機能を持つ農地であることに驚きました。その土地に根付いて代々続く農業者の歴史の話を聞きましたが、地域とも密接に繋がっており、繋がるための方策を真剣に模索している印象でした。野菜の自動販売機もありましたが、我が国に輸入したらどうかと思う程素晴らしいものです。

また、防災訓練を行っている農園も視察しましたが、農業者がそのようなつながりを提供してくれている点は、練馬や地域にとってコミュニティ・センターのような役割を担っていると思われ、大変素晴らしいことだと思いました。

世界都市農業サミット宣言

練馬区において開催された「世界都市農業サミット」において、都市農業を積極的に推進するジャカルタ、ロンドン、ニューヨーク、ソウル、トロントの参加5都市と練馬区は、都市農業に関する取り組みを相互に学び合い、情報共有を進め、活発な議論を行った。

私たちは、世界の人びとが農ある都市で暮らすことに誇りを持ち、持続可能で豊かな都市生活を送るために、以下に“都市農業”の意義と可能性を確認し、ここに宣言する。

1. “都市農業”は、いのちを育む

都市農業は、農産物の生産によって、都市に暮らす人間のいのちの糧を提供している。また、気候変動の緩和・適応のための重要な手段となりうる。それだけではなく、都市の持続可能性を高め、多くの生き物のいのちを育んでいる。

2. “都市農業”は、歴史と文化を育む

都市農業は、人と人とのつながり、そして、人と自然とのつながりを創り出す。そのつながりをもとに、都市の人びとは、歴史と文化を継承、創造し、発展させている。

3. “都市農業”は、公正で開かれた社会を育む

都市農業は、誰もが等しく農に触れ、耕し、農の恵みを享受する場となりうる。それは、社会的課題を解決し、公正で開かれた社会を創り出す。

これからも私たちは、“都市農業”が持つ魅力や可能性を世界の人びとに発信していく。本サミットで培ったネットワークを活かし、相互に連携しながらその可能性を拓き、新たな取り組みを広げることで、“都市農業”の発展に貢献する。



2019年12月1日
世界都市農業サミット 参加者一同

December 1, 2019

Urban Agriculture World Summit: Declaration

Urban Agriculture World Summit was held in Nerima City, Tokyo, and attended by representatives of five other cities that are also proactively promoting urban agriculture initiatives: Jakarta, London, New York, Seoul, and Toronto. Summit participants learned from one another's urban agriculture efforts, shared information, and engaged in lively discussion.

In order for people in cities around the world to proudly live in harmony with agriculture and lead sustainable and abundant urban lives, the participants agreed upon the following declaration affirming the significance and potential of urban agriculture.

1. Urban Agriculture Can Nurture Life

Urban agriculture provides the staff of life to people in cities by producing agricultural goods. Urban agriculture can be an important strategy to mitigate and adapt to climate change. Moreover, it promotes urban sustainability and nurtures lives.

2. Urban Agriculture Can Preserve History and Foster Cultural Diversity

Urban agriculture connects people with one another and with nature. Based on these links, people in cities pass on, create, and develop historical and cultural traditions.

3. Urban Agriculture Can Create Just and Open Societies

Urban agriculture has the ability to create platforms for everyone to learn about and engage in agriculture on equal terms, and to share equally in its bounty. This resolves social issues and creates just and open societies.

We will continue to communicate the appeal and potential of urban agriculture to the people of the world. Utilizing networks built up by this summit, we will collaborate in contributing to the development of urban agriculture by opening up possibilities and extending new initiatives.



The Participants
Urban Agriculture World Summit

南大泉の“農の風景”が 連続した地域を視察！



大泉第二小学校の 児童による歓迎

①

いずみ児童遊園にて、児童による「ふるさと」合唱の歓迎を受けて、視察がスタートしました。
古くから農村では農業の神を信仰し集落や一族の鎮守として建てられた「愛染稲荷」についても説明しました。



鈴木輝章氏の農地

②-1

住宅や商業施設に囲まれた中に農地があります。練馬ではこのような風景を多く見ることができます。鈴木氏の畑では、キャベツ・枝豆・トマトブロッコリー等の多品目の野菜を栽培しています。



農産物自宅前直売所

②-2

区内には約270か所の農産物の直売所があり、新鮮な練馬産農産物を購入することができます。
写真はコインロッカー式の直売所です。



南大泉三丁目 区民農園

③

「区民農園」とは、区が農業者から借りた農地を整備し、区民の方に貸し出す制度です。自宅の近所で気軽に野菜や花の栽培を楽しめるため人気があります。



「農の風景育成地区」に指定された南大泉三・四丁目を視察しました。

「農の風景育成地区制度」とは、農地や屋敷林等が比較的まとまって残る地区で、農地等の保全を図るために都市計画制度等を活用して、地域のまちづくりと連携しながら農のある風景を保全・育成していく制度です。

④ 果樹あるファーム (高橋ベリーガーデン2)

「果樹あるファーム」とは、区内で生産されているブルーベリーやカキ、ブドウなどの果樹を摘み取ったり、直売所で購入できる農園です。区内には、摘み取りができる観光農園が38か所あります(令和元年度現在)。こちらは西武池袋線保谷駅から徒歩3分で行けるブルーベリーの摘み取り園です。



⑤ 高橋正悦氏の農地

高橋氏の畑では、キャベツやコマツナ、ジャガイモ、ダイコン、ネギ等を栽培し、すぐ隣にある直売所で販売しています。練馬の農業者は、消費者である住民のニーズに応えるため少量多品目栽培が一般的です。



⑥ 果樹あるファーム (シトラスファーム高橋)

ミカンの摘み取り園です。
甘くてほど良い酸味の温州ミカンを味わうことができます。



⑦ 加藤トマトファーム

養液栽培により、大玉・中玉・小玉のトマトを栽培しています。培地として使用している「ヤシガラ」は、使用後に土壌へと還元することができる環境にやさしい資材です。



⑧ 農業体験農園 (緑と農の体験塾)

農業体験農園は練馬区発祥の畑の学校です。利用者は農園主の指導のもと、種まきや苗の植え付けから収穫まで、一連の農作業を体験できます。農園主の丁寧な指導を受けながら、野菜の栽培を楽しむことができます。詳しくは25ページをご覧ください。



農業体験農園 (緑と農の体験塾)

農業体験農園を見学

園主である加藤義松氏が、平成8年度に全国で初めて農業体験農園を開園しました。ここでは、町会と協力し防災訓練として、農産物を使用した炊き出し訓練を実施しています。農地には、震災時の避難場所や農産物の供給といった防災機能があります。

農園の利用について説明する
加藤義松氏

練馬区区民防災課による
備蓄物資の紹介

農地で昼食

炊き出しだけでなく、
農園で採れたトマトや
サツマイモなどの
新鮮な野菜も好評でした。

海外参加者にも
炊き出しを提供

防災ヘルメットを試着する
ネヴィン・コーエン氏

加藤トマトファーム

加藤トマトファームの
コインロッカー式直売所

海外の参加者は、コインロッカー式直売所に対し、
「新鮮で健康的な農産物を誰でも低価格で手に入れられる、
非常にシンプルで民主的な流通である」とコメントし、感銘を受けていました。

サミットの開催に合わせ、区内大学の日本大学芸術学部の学生に
直売所をより親しみをもってもらえる様にデザインしてもらいました。

視察の様子

練馬区 農の学校

「練馬区 農の学校」は、農業者を支える「ねりま農サポーター」を育成するため、区内農業者の講師による実技や座学講座等により、支え手としての技術や知識を学べる場です。修了した受講生を「ねりま農サポーター」として認定し、支え手を必要とする区内農業者と繋げています。

熱心に説明を聞く
ソウルの参加者

韓国から見ると日本の農業は先進的であるため、ベンチマークとして視察先に選ばれることが多いそうです。

カン・ハンソン氏が農業を営むソウル特別市江西区(カンソク)は、地理的にも練馬と似ていることから、学べることが多いと話していました。

農園で収穫した
野菜を使った漬物を食べる
ジャカルタの参加者

世界都市農業サミット記念コンサートWorld JAZZ

出演者全員による
パフォーマンス

寺泉憲さん

サミット開催を記念して、一流のミュージシャンによる
サミット参加国に関連した曲の演奏が楽しめるジャズ
コンサートを開催しました。

会場では、区内シェフやパティシエによる練馬産農産物を使用した料理やケーキなどを提供しました。

Nerima Chefs Club
による出店



11/30
(土)

練馬大根 引っこ抜き競技大会



大会で収穫された
練馬大根



引っこ抜いた練馬大根を掲げる海外参加者

中太で長い練馬大根は、青首大根に比べて、引き抜くのに3~5倍の力が必要とされています。その練馬大根の特徴を生かし、平成19年度からJA東京あおばと共催で開催している一大イベントが「練馬大根引っこ抜き競技大会」です。

大会では、時間内にどれだけ多くの大根を引き抜けるか(選手権の部)、どれだけ長い大根を引き抜けるか(グループの部)を競います。

大会で収穫した大根は、区立全小中学校の給食に使用され、食育にも活用します。

今大会は、世界都市農業サミット記念として、駐日大韓民国大使館、都内大学等に通う留学生や区内在住の外国籍の方を対象とした「イイねりまツアー」参加者の方々も参加され、国際色豊かな大会になりました。



大会の応援に駆け付けた
ねり丸、GODAI君&すず夏ちゃんと
海外参加者



グループの部に参加した留学生



向山庭園で日本文化体験・昼食

向山庭園は、四季を感じながら区民の憩いと交流の場を提供するための施設です。この日は、区内で活躍する華道茶道連盟による抹茶体験等を行いました。



抹茶体験



練馬産農産物を使用した日本食の提供

区内で和食料理店を営む小料理石井の店主石井氏が、料理の説明をしながら、海外参加者に日本食を召し上がっていただきました。石井氏は、日頃から練馬産農産物を使用しており、地元の農業者から直接仕入れることで、野菜の良さや状態を直接聞くことができ、より美味しい料理の提供に繋がるそうです。



紅葉鑑賞



引っこ抜き競技大会／向山庭園

世界都市農業サミット宣言に向けた意見交換会

分科会登壇者が一堂に会し、各分科会の座長による総括と、議論の内容を全員で共有しました。
その後、「世界都市農業サミット宣言」の発表を翌日に控え、宣言文に関する最終打合せを行いました。海外参加者からは都市農業に対する熱い想いと共に、気候変動に関する文言の追加など、様々な意見を集約した結果、参加者全員の総意を得た宣言文に仕上がりました。



翌日のサミット宣言発表に向けて
各都市からの意見を集約



タウフィック・ユリアント氏



イ・チャンウ氏



アンドレ・フルヨン

気候変動について語る
アンドレ・フルヨン氏



宣言文について話すネヴィン・コーエン氏と
マーク・アインズバリー氏



農業を活用した都市環境の
改善について語る
ロンダ・ティテル=ペーン氏



サミット宣言の起草から
携わった渡戸秀行氏



分科会
登壇者



みんなde農コンテスト 企画実施部門

平成30年度のサミットプレイベントにおいて、「都市での暮らしをより魅力あるものにするためのまちなかの農」に関する企画を募集し、3団体が入賞しました。3団体は、考案した企画を1年間実施し、その成果をプレゼンテーションしました。表彰式では大賞・JA東京あおば特別賞・会場賞の表彰を行い、「産地＝開進第二中学校」を実施した「練馬区立開進第二中学校 農部」が大賞および会場賞を受賞しました。

ねりまみどりの教室

(東京学芸大学附属国際中等教育学校 EApOrT)



生徒が中心になり小学生を対象に都市農業を学ぶ教室を開校しました。農業者の協力のもと、野菜の収穫や出荷体験などを通して都市農業を学び、練馬まつりで都市農業の魅力を発信しました。

産地＝開進第二中学校

練馬区立開進第二中学校 農部



校内にある1,000㎡を超える畑で、年間20種類以上の野菜を栽培しています。社会福祉法人が運営する「手づくり焼き菓子かすたねっと」と連携し、野菜の販売を通じて地域へ「まちなかの農」を発信しました。

果樹とふれあい・親と子の心を育む農業体験教室「ぶどう畑のミツオさん」

(NPO法人みどり環境ネットワーク！／みやべぶどう園)



冬期から収穫期までのぶどうの栽培過程を親子で楽しみながら体験する企画です。8月に「収穫祭」を開催し、ぶどうの摘み取りやぶどう染め体験などに、400名以上の方が参加しました。

表彰式

農部は、観覧者からの投票により決定する「会場賞」も受賞しました。

大賞の表彰
(練馬区立開進第二中学校 農部)



JA東京あおば
特別賞の表彰



東京あおば農業協同組合の
酒井利博代表理事組合長から、
特別賞を2団体へ授与しました。

300を超える方に投票して
いただきました。投票者には、
「練馬江戸栗プロジェクト」参加店舗が
販売する練馬産の栗を使用した
お菓子をプレゼントしました。



来場者による
会場賞の
投票の様子



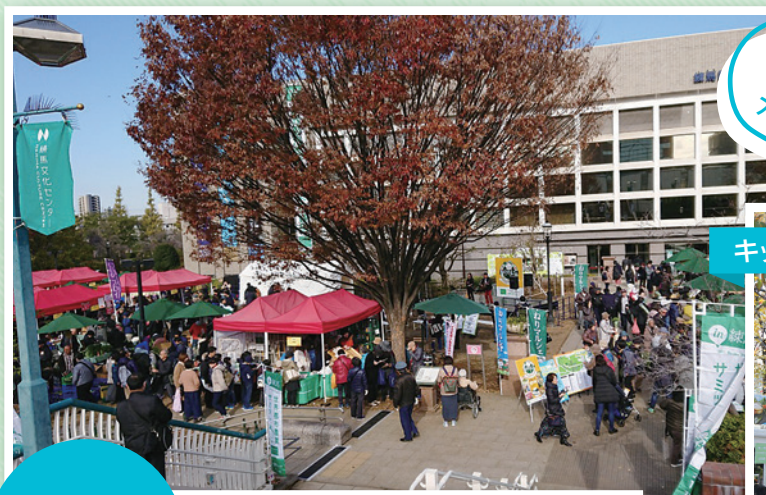
渡戸秀行審査委員
による講評



大賞を受賞した「農部」の
取組は、学校での農業体験や
学校農園を多くの学校に
広げることに示唆を与える
素晴らしい取組であると
評価しました。

ねりマルシェ in 世界都市農業サミット

平成27年から区内農業者とともに毎年11月に開催してきた「ねりマルシェ」を、世界都市農業サミットに合わせて規模を拡大し、「ねりマルシェin世界都市農業サミット」として開催しました。練馬の採れたて野菜や果物、お花、練馬産農産物を使った加工品等の販売の他、農家バンドや区内小学生・大学生によるステージイベント、キッチンカーによる練馬大根を使ったメニューの提供、日本大学芸術学部デザイン学科と連携して製作した農産物購入者向けのオリジナルバッグのプレゼント等、楽しい内容が盛り沢山でした。都内大学等に通う留学生もねりマルシェでの販売体験に駆け付け、国際色溢れる大盛況なイベントとなりました。



ねりマルシェ
会場の様子

区内の人気飲食店が練馬大根を使ったメニューをマルシェ限定で販売しました。

キッチンカー出店エリアの様子



来場者で賑わう
練馬産野菜の販売ブース



農家バンド「だいこんRADISH」の出演ステージ



日芸デザイン学科の
学生がデザインした
オリジナルバッグ

採れたての練馬産野菜が
沢山入ったオリジナルバッグを
肩に掛けて会場を巡る
来場者が印象的でした。



来場者に、練馬の農や自然に
まつわる思い出やおすすめ情報を
書き込んでもらいました。



来場者みんなで作り上げたねりま都市農MAP

キューピー(株)による
マヨネーズ作り体験教室



圃場での収穫体験や
マルシェでの
販売体験を
行う留学生

TOKYOとれたて♡ライフin練馬



練馬産野菜を使った
とれたてスムージーが楽しめる
キッチンカーを出展しました。



ねりまワールドフェスティバル

世界各国の料理やお酒、雑貨などがCoconeriに集結しました。
約10,000名の方にご来場いただき、民族衣装や伝統音楽の体験のほか、世界各国の舞踊や音楽をお楽しみいただきました。



1万名の来場者が会場を埋めました



世界各国のお酒や雑貨を販売



友好都市
オーストラリア・
イプスウィッチ市の
訪問団による
都市紹介講座



練馬大根を手に
練馬への思いを語る
オスマン・サンコンさん



サンコンさんも
書道に挑戦！



伝統楽器体験や
民族舞踊の
ステージ

フェアウェルレセプション

ホテルカデンツァ光が丘で、海外参加者への感謝を込めて、フェアウェルレセプションを開催しました。練馬産農産物を使用した料理をはじめ、ベジタリアン料理やハラル料理を提供しました。
また、古くから農業にゆかりのある催しとして、「和太鼓」と「お囃子」を地域で活躍する団体が披露し、会場を盛り上げました。



石神井太鼓保存会 せんば太鼓
による収穫太鼓の演奏



農作物の収穫に感謝し
豊作を祝う風情を、和太鼓の
響・轟・余韻で表現します！



南田中囃子
保存会による
お囃子



イプスウィッチ市
デイヴィッド・ファーマーCEO(首席行政職員)



友好都市提携25周年に際して訪問した
オーストラリア・イプスウィッチ市からの
訪問団も参加しました。

獅子舞は、豊作祈願や疾病退治などを
するものとされ、人の頭を噛み、
取りついた邪気を食べることで、
病気や悪魔などから身を守るといわれています。
海外参加者も頭を噛まれていました。

練馬区伝統工芸会の職人が
作製した絹(きびそ)の
ストールや巾着などを
記念品として海外参加者に
贈呈しました。



大泉町農地視察

12月2日（月）には、希望する海外参加者へオプションツアーを実施しました。大泉町の農地3か所を巡り、農業者との交流を図りました。その後、区立開進第二中学校を訪問し、校内視察や生徒と一緒に学校給食を食べ、交流しました。また、みんなde農コンテスト大賞を受賞した「農部」の部員との交流も行いました。

莊竺園（莊竺晃一氏）

莊竺園ではカキやミカンの摘み取りを行っています。



ジャカルタでもカキは人気のある果樹なので、栽培方法など熱心に質問していました。

キャベツ畑（村田豊氏）

村田氏はキャベツを市場出荷しています。



サミットのポスターをはじめ、本記録集の表紙などに掲載の写真はここでのキャベツ畑です。



農業体験農園（大泉風のがっこう）

園主である白石好孝氏は、市場出荷や自宅前直売、農業体験農園などを行っています。



ビニールハウス内の農地も視察し、ここでも熱心に質問していました。

練馬区立開進第二中学校視察



生徒との交流

練馬大根スパゲティ



校内視察

区立小中学校では、練馬産農産物を使用した給食を一齐に提供する取組を行っています。11月にキャベツ、12月には練馬大根引っこ抜き競技大会で収穫した練馬大根を使用した給食が提供されています。また、普段から地元産農産物の使用を推進しています。



農部の部員との交流



校内にある農部の畑



校内には1,000㎡を超える立派な畑があり、毎年40種類以上の野菜を栽培しています。部活動では、収穫した農産物を使用して調理をするなど、食育に繋がる活動も行っています。ジャカルタのメイディアンティ氏も校内にある広大な畑に驚いていました。